

榮西の一心戒について

荻 須 純 道

一

1 榮西の一心戒について

建仁戒壇錄に收められる洞門面山瑞方（一六八三—一七六九）の禪門大戒普説によれば禪門の羯磨は達摩大師が傳來して、これを二祖慧可に授け、僧璨・道信・弘忍と祖々授け、六祖慧能にいたつて心地無相の戒壇を立て、道俗にこれを授けたとある。そして六祖壇經というのは戒壇の經であるといひ、またこれは南宗のみでなく、北宗においても達摩の戒を傳えたもので、天平八年（七三六）に來朝した道璿は高山普寂の嗣として、はじめてわが國に北宗禪を傳えるとともに菩薩戒をその嗣行表に授け、行表はさらにこれを最澄に授けている。そして最澄はのち入唐して、重ねてこれを馬祖下の王姥山脩然⁽¹⁾に受け、歸朝して圓頓戒壇を立てたとしている。

榮西は入宋して虛庵懷敏に菩薩戒を承けて歸朝し、これを門下に授けた。道元もその門下として、はじめ榮西に參じたが、不幸にしてその示寂に逢つた。しかし榮西寂後も建仁に留まること九年であり、ついに榮西の嗣佛樹明全についてその戒を受けたのである。それで道元は榮西の戒孫であると面山はいう。面山は道元の佛樹忌上堂の法語を引用し、このことを證している。すなわち

「正法眼藏を開演せんと欲せば、第一義門あり、第二義門あり。拈鎚・豎拂・頂顙・眼睛・鼻孔・脚跟」といひ拄杖を階下に擲下して云く「這個は第二義門の施設なり。且らく道へ、作麼生か是れ第一義門、山僧今日佛祖の第一義門を開演し、所生の功德、先師大和尚に回向す」遂に擧げて云く「迦葉尊者阿難尊者に問ふ。何等の一偈か三十七品及び一切の佛法を出生する

や。阿難云く、諸惡莫作、衆善奉行、自淨其意、是諸佛教と。迦葉これを然りとす。大衆這個の道理を委悉せんと要するや」良久して云く「佛祖甚深最妙の旨、猶今夢先覺なきが如し。弟兄佛口所生の一偈を單傳す。是れ本孝なり」

としている。道元は榮西の菩薩戒を明全から傳受したが、さらに入宋し重ねて天童如淨にこれを受け、歸朝の後戒脈を整えたのであるが、これは濟洞一轍の戒であると面山はいっている。

寶曆十一年（一七六一）面山が建仁寺福聚院に寓居したとき、建仁寺住山の北礪道爾をはじめ一山の住僧は佛誕の日面山に、梵網戒經の開示を請うた。そこで四月十六日開講し、五月十四日滿講となり、翌十五日、榮西の塔所である護國院の祖堂を莊嚴して戒壇を設け、大戒を面山から受けたのである。このとき面山は七十九歳の高齢であつたが、己が屬する洞門の道元が榮西の戒孫であり、戒脈相續して面山にいたつたものであることに感を深くし、自ら「千光祖師第三十一世戒孫面山瑞方」として、一山住僧に大戒を付している。このとき面山は洞家の古式によつて傳戒したと思われるが、最初榮西が虛庵から受けた菩薩戒は禪門の一大事因縁なりとし、建仁一山に禪戒の復興をしたのである。

さきに心地覺心（法燈國師）は入宋前道元から菩薩戒を受けたが、さらにその嗣孤峯覺明（三光國師）は同じく曹洞の瑩山からこの菩薩戒を受けている。京都宇多野の妙光寺には三光國師筆「受戒作法」が傳わり、「榮西僧正傳法作法」とされている。すなわち道元は榮西の戒孫であり、そして道元の法孫である瑩山から三光國師すなわち孤峯覺明にこれが傳つたものである。そして覺明は元應二年（一三三〇）世壽五十歳のとき榮西の圓頓一心戒和解なるものを述作したが、これをまた兩足院の高峰東叟が寶曆十一年面山に席を請い、これが流通を計っている。

二

榮西の説く圓頓三聚一心戒によれば、佛一代の聖教の所説である大小權實の戒には深淺があるが、これを概括すれば四つあるといっている。すなわち人天戒・小乘戒・菩薩戒・佛戒である。第一の人天戒とは五戒・八戒・十善戒をいうので、これをよく持つものは人天の報いを受けるが、その報いが盡きれば惡道に墮するといっているのである。しかし戒徳があるから、たとえ地獄に墮しても他の無戒のものとは異つており、あたかも柳葉が秋凋落しても、春ともなれば他の落葉樹にさきだち萌え出で、春

色を得るようなものである。この戒を持つことによつて人天の報いを得、意の欲するところにしたがつて行動し、その報い盡きて地獄に墮することを、柳葉の秋凋落するに喩えたものであり、戒徳を積まねばならないものとしてゐる。

第二には小乗戒である。これは比丘に二百五十戒といひ、三千の威儀・六萬の細行がある。比丘尼はさらに多く五百戒といひ、六千の威儀・十二萬の細行という實に厳しいものである。しかしもし一戒でも怠り誤まれば、三惡道に墮すると誡められている。もしよく持てば聲聞・緣覺の二乗とはなるが、佛種を滅するものとなる。しかし戒徳があるから、地獄に墮ちても、畜生道に墮しても、無戒のものとは異り優位な地位を占める。いつたこの戒は破れやすく、一戒でも破れば一切戒がみな破れる。あたかも土器のようなもので、一度破れれば二度と役には立たないとしている。この戒は二乗戒とも小乗戒ともいわれているが、像法の中頃には失われ、末法の世となつては跡形もなくなつたもので、近來のものがこれを受けることは、石を抱いて淵に入るようなものである。威儀と行とを一つでも破るならば、惡道に墮するような戒行であるから、凡夫の身をもつて小乗戒を受け、ついに守れず惡道に行くことは心憂いことである。身と

口とばかり守つて、心中の妄念妄情を顧みないことは小乗戒の欠點である。

またその細行というのは、たとえば山に籠り水を服するとか、物の氣を服するとか、毎に剃髪したり、あるいは髪を長く延び放しにするとか、草衣木皮を着たり、冬は水に入り、夏は身を焼き、或は高原より墮ち、日に三度恒河に沐浴するとか、肉を斷ち食を絶し、無言を行じ、瓦上に臥するなど、行々あげ數えれば十八萬にも達するという。詳しくは大論（大毘婆沙論）卷十三を見よといつてゐる。傳教・慈覺兩大師はこの文を引用して外道が苦行して身を責め、終に空に墮した證據としたといひ、この外道というのは二乗のことであるとさえ極言している。一念をも二乗の心をおこしてはならない。もし一念二乗の心を發すれば菩薩戒を犯すことになる。それで傳教大師は大乗戒を受けてのち、自ら誓願し、自今以後聲聞の利益を受けじとし、二百五十戒を捨て、慈覺大師は地獄に墮ちて無量劫を経るとも小乗の法は手にもとらじ、口にも誦せじといつたといひ、成佛道のためにはこの小乗は忌むことであると破斥している。

第三には菩薩戒であるが、詳しくは菩薩大乘方等戒といひ、菩薩三聚淨戒といわれる。この戒を持てば佛となる。破れても轉輪聖王となり、三生に成佛することが出

來るとする。この戒はあたかも金銀の器のようなもので破れやすくなく、破れても金銀であるから價值があるようなものである。この菩薩三聚淨戒には攝律儀戒・攝善法戒・饒益有情戒の三つがある。

攝律儀戒というのは十重禁戒・四十八輕戒をいうのである。四十八輕戒はしばらくおき十重禁戒は受けなければならぬ。この戒を受けるためには傳受戒・發得戒・性得戒の三種を受け守らなければならない。この三種戒は一つも欠くことが出来ないものである。すなわちこの傳受戒というのは血脈相承のことであり、發得戒は受戒の功德・得分を知り、やがて成佛する道理を知ることであり、性得戒とは法身地の道理は天然にわが心中に具わっているから、この戒を受ければ、やがて佛位に入ることと覺知するにいたるものであるとする。

大海は炎天でも乾かないし、雨が降つても増さない。日夜に河水が流れ入つても、その鹽の味はかわらない。まして法海は廣大無邊であり、その法海に充つる戒も無量である。この法海の一切戒を一時に受けよという。たとえ破れることがあつても、一時に一切が破れることはない。あたかもそれは大海に入る水のようなもので、濁つても、不淨であつても、また洪水であつても、一度海に入れば鹽水になるようなもので、この菩薩戒を受けられ

ば、たとえ戒を犯しても、その罪は大海に入る水のようなもので、罪がとどまることはない。人の罪過というのは煩惱と惡業と生死の三つである。煩惱は濁水の如くであり、惡業は不淨水の如くであり、生死は洪水の如きものである。水が河や池にあるときは別々の水であるが、大海に入ればやがて一潮となるようなものである。

この菩薩戒を受けたのちは、海に入つた水のようなものであり、みな戒の功德によつてとどまる罪過もなく、佛海に加わるものである。煩惱を菩提となし、惡業を解脱とし、生死を涅槃とするのもこれがためである。三界六趣に輪廻する生死の悲しみも不生不滅の身をなり返せば、日頃思ふ迷いは夢が醒めるように跡形もなくなる。これを發信するために攝律儀戒を受けるのである。この戒の中には十重禁戒、四十八輕戒等すべておさまるのである。

次に攝善法戒というのは、あらゆる功德をおさめ盡した戒である。これは一善を修しても一切善となるのであつて、大海に一滴の水が入つても、他と融して一味の鹽水となるが如きであるとしている。しかしこの戒德を受けるためには、四つのことを持たねばならない。すなわち一には菩提心を捨てず、二には佛をはなれず、三には法をはなれず、四には僧をはなれないことである。菩提

心を捨てずということは、われ佛となつて衆生を佛とた
さんということを念願することであり、佛をはなれずと
は、極樂の佛とわが心の佛とは片時もはなれず一つであ
ると思うことであり、法をはなれずとは、淨土の佛の説
法とわが心内に具えた法とは片時もはなれていないと思
うことであり、僧をはなれずとは、文殊・普賢・觀音・
勢至等の菩薩僧とわが心内の和合僧とは、片時もはなれ
ぬと思うことである。この四つを忘れないことを萬法總
持の行者といい、佛位に登ることが出来るとし、菩提心
を捨てず、佛法僧の三寶をはなれないことを示し、これ
を攝善法戒というのであるとしている。

また菩薩戒の饒益有情戒というのは攝衆生戒ともいわ
れるもので、これはわれわれがもし佛とならば衆生を成
佛さす徳用をそなえるものであるとすることである。釋
尊五百の大願を尋ねれば、この戒をとり五百に分ちて持
たれたといひ、彌陀の四十八願、藥師の十二願、普賢の
十願等はすべてこの戒によるものであるとしている。凡
そ諸佛菩薩の別願はみなこの戒をとるもので、衆生を成
佛せしむるのがこの戒である。この戒は衆生を成佛せし
むる戒であるから、諸佛はこれをとつて別願とされたも
のであるとしている。それでこの旨を心得てこの戒を受
ければ諸佛菩薩の別願と一つであるとし、わが一心に持

てば、その功德は無量である。この戒を受けてのちは、
生死の苦は抜け、涅槃三徳の樂が與えられる功德を、わ
が身に備えるにいたるのである。これもまた發明發得の
義を會得しなければならぬ。これを饒益有情戒とも攝
衆生戒ともいうのであるが、このように菩薩三聚淨戒は
攝律儀戒・攝善法戒・攝衆生戒の中、一つでも欠ければ
菩薩の大戒とはならないから、この道理を知らずに人に
授戒すれば、その罪は深いものとなる。よき戒師に習い
學んで三聚戒を授くべきであるとしている。

第四には佛一心金剛寶戒である。これは榮西の圓頓三
聚一心戒の最後に説いているものである。これはわが心
が佛であるということを知るから、法華佛戒ともいうも
のであるとしている。一心というのは萬法の種子であ
り、法華經には常自寂滅相と説き、楞伽經には寂滅とい
つてゐるが、これは一心を名けて如來藏という。これを
天台の止觀でいえば一念の心は如來藏の理であり、如の
故に即空であり、藏の故に即假であり、理の故に即中であ
る。この空假中の三智が一心の中に具わり、不可思議
であるといつてゐる。凡そ佛一代の聖教において、その
所説の不思議の極理というのはこの一心をいうのであ
る。この一心を悟り知れば、それは小さなものでもな
く、また大きなものでもない。極小の芥子の中にもこも

り、廣大無邊の虚空の中にも満ちている。色もなく、形もなく、生れることもなければ、死ぬこともない。始めもなければ、終りもなく、火にも焼けず、水にも溺れないものである。

われわれはこの心法を悟らず、無始以來、六道を輪廻し、猛火の炎に焦され、無量劫を経て來たが、この心は焼けず、焦されず、また失われなかつた。この心には多くの異名がある。すなわち如來藏・實相・中道・法身・法性・本覺・眞如・佛性・實際・畢竟空・涅槃・泥洹・寂滅・虚空・法界・不思議・妙有・妙色・元初・元品・元始・一心・一念・第一義諦等あるが、これはみなわが一心の名稱である。これを悟る人を名字即の人というのである。この名字即の人は一切法がみな佛法なりと悟り知っているから、その心、その行いが佛意にそむくことはない。この人は不始戒（一本に不婬戒）を持つという。佛はこの理を悟られ淨戒を持たれたのであるが、いまから相傳したこの戒を受けることは、圓人となることになり、やがて佛になることを信ずるその心が金剛の如くで、たゆむことなきを一心金剛實戒というのである。

梵網經には衆生が佛戒を受けるとき、やがて諸佛の位に入ると説かれている。安然の「普通授菩薩戒儀廣釋」には圓乘の戒法では、一切の諸法はみな佛法であるか

ら、佛法の中には犯す戒もない。犯す戒がなければ戒法は常住であると説かれている。淨行經には佛のみ淨戒を持ち、餘人はみな戒を汚穢していると説いている。この淨戒とは不始戒のことである。しかし圓乘の人は諸法眞を究竟して不始戒を持つているから、佛と圓人のみが不始戒を持ち清淨である。不始戒とは一切の善惡に觸れて執らわれる心がないことである。迷いは夢中の所作であつて、實は跡形もないものであるが、これを無始以來執着心をもつて來たから流轉の凡夫となるのである。この戒を受けたいまよりのちは何事をなしても、この身は假りの身であり、夢のしわざであるとして執らわれ疑うてはならない。あやぶみ疑う心が些子でもあれば大罪過である。信ずる心が金剛の如く固ければ、やがてその心が佛であるから佛一心金剛實戒というのであるとし、即心戒體であつて、要は心地を悟り知らしめんがためであるとしている。

三

以上は榮西の圓煩三聚一心戒の概要である。榮西は人天戒・小乘戒を斥け、菩薩戒をすすめ、さらに一心金剛實戒によるべきことを説いている。その究竟するところは即心戒體で、心地を悟らしめんがためである。すなわ

ち一心戒とは己心の妙戒であり、菩提達摩から慧可に授けられて以來、師資授受相傳され、わが國へは北宗の普寂の嗣道璿によつて傳えられ、道璿・行表・最澄を次第している。最澄の嗣光定が最澄の大乗戒壇設立は自性清淨一心戒を立てるためであるとした。一心戒儀軌によれば達摩以後の血脈相承を次の如く記している。

菩提達摩—北齊慧可—隋朝僧璨—双峯道信—黃梅弘忍—唐朝大通(神秀)—華嚴普寂—興福道璿—行表法師—入唐沙門最澄—慈覺大師—惠亮和尚—常濟闍梨—承誓闍梨—理仙闍梨—慈惠大師—源信僧都—覺超僧都—定誓律師—惟命闍梨—良眞座主—嚴算闍梨—玠仁闍梨—隆惠闍梨—證眞法師—永尊法印—兼海僧都—宗春僧都—宗直法印—證憲—中訓—天龍大虛—建仁龍統—叡山に傳つた達摩の一心戒は、のち臨濟の天龍大虛や建仁龍統に傳授されて來たことが注目される。建仁の龍統が大虛から授けられたという達摩相承一心戒儀軌によれば、一心の妙戒は「己心の戒を以て眞の妙戒の壇となし、三世の薩埵はこれを以て養育の父母となし、十方の諸佛は恒に居す道場となす。受戒とは己心の妙戒を受くるをいう。受とは傳なり、傳とは覺なり。衆生即ち佛心を悟るを眞の受戒と名づく。壇とは唯佛と佛と、還つて心地に居して正覺を成じ、己心實相の地に居するを眞の

壇を履むと名づく」といつており、この己心の妙戒を受得するために十重禁戒が授けられている。すなわち

- (1) 自性靈妙、於三常住法中、不_レ生三斷滅、見_一、名爲三不殺生戒。(汝從今身盡未來際、能持否、三返、答言、能持、證憲、以_二自性靈妙_一、作_二十法界色心_一)
- (2) 自性靈妙、於三不可得法中、不_レ起三可得、念_一、爲三不偷盜戒。(已上同前)
- (3) 自性靈妙、於三無著法中、不_レ起愛著見_一、爲三不姪欲戒、
- (4) 自性靈妙、於三不可說法中、不_レ說三一字_一、爲三不妄語戒、
- (5) 自性靈妙、於三本來清淨法中、不_レ生三無明_一、爲三不飲酒戒、
- (6) 自性靈妙、於三無過患中、不_レ說三過罪_一、爲三不說四衆過罪戒、
- (7) 自性靈妙、於三平等法中、不_レ說三自他_一、爲三不自讚毀他戒、
- (8) 自性靈妙、於三眞如周遍法中、不_レ生三一相堅執_一、爲三不堅貪戒、
- (9) 自性靈妙、於三無我法中、不_レ計三實我_一、爲三不瞋恚戒、

(10) 自性靈妙、於三如法中、不起生佛念、爲不謗三寶戒。

師言、願以此功德、普及於一切、我等與衆生、皆共成佛道。

應永廿年二月廿七日、以此奉授訓藏司一畢、爲傳授支證加署者也。傳燈大法師證憲、判私云、大虛和尚、授予以此本。然有小異、所以葉上一流爲正傳也。龍統志之。

證憲乃叡山東塔花王院也。

これは天龍の大虚が建仁の龍統に授けたものであるが、この己心の妙戒は應永二十年七月二十七日、叡山東塔花王院の證憲が中訓藏司に傳授したものが基本となつてゐるようである。ところで(1)の註にあるように證憲は「自性靈妙」を「十法界色心」としたとある。一心戒儀軌によれば、「佛乘圓頓金剛寶戒」となし「不須三和尚、不白四羯磨」として「十法界色心」の十重禁戒が所收されてゐる。

(1) 十法界色心、於常住法中、不起斷見、爲不殺生戒。

(2) 十法界色心、於不可得法中、不起可得念、爲不偷盜戒。

(3) 十法界色心、於不著法中、不起愛著、爲不姪欲戒。

(4) 十法界色心、於不可說法中、不說一字、爲不妄語

戒。

(5) 十法界色心、於本來清淨法中、不生無明、爲不飲酒戒。

(6) 十法界色心、於無過患法中、不可說過罪、爲不說四衆過罪戒。

(7) 十法界色心、於平等法中、不說自他、爲自讚毀他戒。

(8) 十法界色心、於眞如周遍法中、不一相堅執、爲不堅貪戒。

(9) 十法界色心、於無我法中、不計實我、爲不瞋恚戒。

(10) 十法界色心、於一如法中、不起生佛念、爲不謗三寶戒。

となつてゐる。しかし大虚が龍統に授けたものは「十法界色心」でなく「自性靈妙」としたもので、小異があるとしてゐる。その所以は、葉上一流が正傳であるとしたからである。

すなわち榮西は改めて入宋虚庵懷敏から傳戒された。

自らまた異ところがあつたとされる。一心戒儀軌に收録される「千光祖師自宋朝相承來自性戒」によれば、次のように記されてゐる。

(1) 自性靈妙、於常住法中、不發生斷滅見、名爲不殺生戒。

- (2) 自性靈妙、於三不可得法、不_レ生_三可得見_一、名_チ爲_ス三不偷盜戒_一。
- (3) 自性靈妙、於三無著法、不_レ生_三愛著見_一、名_チ爲_ス三不姪欲戒_一。
- (4) 自性靈妙、於三不可說法、不_レ生_三可說相_一、名_チ爲_ス三不妄語戒_一。
- (5) 自性靈妙、於三本來清淨法、不_レ生_三無明_一、名_チ爲_ス三不飲酒戒_一。
- (6) 自性靈妙、於三無過患法、不_レ生_三過罪相_一、名_チ爲_ス三不說四衆過罪戒_一。
- (7) 自性靈妙、於三平等法、不_レ生_三自他見_一、名_チ爲_ス三不自讚毀他戒_一。
- (8) 自性靈妙、於三眞如遍法界中、不_レ生_三一相慳執_一、名_チ爲_ス三不慳貪戒_一。
- (9) 自性靈妙、於三無我法中、不_レ生_三實我瞋心_一、名_チ爲_ス三瞋心不受懺謝戒_一。
- (10) 自性靈妙、於三如法中、不_レ生_三生佛二見_一、名_チ爲_ス三不謗三寶戒_一。

榮西は傳戒するとき、三歸戒を唱えなかつた。その所以は不謗三寶戒において、「生佛の二見を生ぜず」とするところにある。自性靈妙の己心の妙戒を受けた衆生

は、すでに佛であるという立場をとつたものであらう。榮西はこの十重禁戒を授けてのち、梵網經の「衆生佛戒を受くれば諸佛の位に入る。位大覺に同じきのみ。眞に是れ諸佛の子なり」と唱え示すのであるが、これはさきに圓頓三聚一心戒の解説において觸れたところである。

四

榮西は戒律を重んじ、持戒梵行を重んじた。その著日本佛法中興願文に「澆漓の世、梵行の比丘跡を削り、福田衰弊の時、人天の依怙全く少れなり。これを謂はんと欲すれば、則ち害せらるべし。將に謂はざらんとし、亦ために知らしめんと欲す。これを爲さんこと如何。說歎共に煩ひ進退云に谷まる。但々一身の陵辱を忘れ、以て三寶の恩德に報いんとす。これ佛法を學する者の根源なり。抑々又如來の本意に非ずや。我が土の衆生比者、善知識を失ふ。何ぞこれを資助せざらんや。庶幾は輔相智臣心をこの願文に留め、具に奏聞を経せしめ、中興の寂慮を廻らし、佛法王法を修復せば、最も望むところなり。小比丘の大願只これ中興の情なり。誰か復思議すべけんや。其の佛法はこれ先佛後佛の行儀なり。——中略——近代の人は此に飜す。持戒を咲ひ、梵行を蔑にす。これを爲さんこと如何。小比丘榮西、此の陵替を救はんが爲

めに身命を忘れて兩朝に遊び、如來の戒藏を學び、菩薩の戒律を持す」といい、持律持戒を強調して、わが國に佛法を中興せんとする意を披瀝し、萎微沈滯する佛教界に清風を送つて、これを救おうとし、身命を忘れて兩朝に學び、如來の戒藏・菩薩の戒律を持つているとしている。榮西は菩薩大戒を持たしめ、さらに佛戒を授けるために十重禁戒を授け、さらに「受戒の人人の卽心戒體なる様を釋して、心地を悟らしめんがため」(圓頓三聚一心戒)に、一心戒を傳戒したものと思われる。

註

(1) 惺然は傳教大師の達摩大師付法相承師師血脈譜により、天台

山禪林寺の僧惺然として知られ、牛頭禪の人とされて來た。

景德傳燈錄卷六によれば馬祖下の人となつており、いま面山の禪門大戒普說も、馬祖下の王姥山惺然として、景德傳燈錄に従つてゐるものようである。しかし景德傳燈錄には行狀機緣語句は記されていない。ところで全唐文卷七一五の韋處厚が誌す興福寺内道場供養大德大義禪師碑銘によれば馬祖下驚湖大義の門下の如くである。拙稿「聖德太子と達摩日本渡來の傳説をめぐりて」(日本佛教學會年報第二十九號)を参照されたい。

(2) 建仁戒壇錄、永平廣錄卷六(日本大藏經曹洞宗章疏一)

(3) 一心戒儀軌は詳しくは達摩相承一心戒儀軌といい、千光祖師の作とされる。寫本今津洪嶽博士所藏

(4) 一心戒儀軌